東アジアの伝統的木造船建造および操船技術の比較研究

期間：2014 年 8 月 25 日～2018 年 3 月 31 日

［共同研究者］
織野英史（香川県立ミュージアム分館
瀬戸内海歴史民俗資料館）
越來勇喜（合資会社越来造船）
出口晶子（甲南大学）
出口正登（有限会社アシスト）
廣瀬直樹（氷見市立博物館）
［代表者］昆　政明（日本常民文化研究所）
前田一舟（うるま市立海の文化資料館）
新垣夢乃（呉鳳科技大学）
王蕾（東京国立博物館）
小熊　誠（日本常民文化研究所）
［業務協力者］
姜婧　宋永和　兪鳴奇
（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）

造船技術の違いは、船材の接合と防水技術に集約される

研究代表者　昆　政明

本共同研究は、2014 年度から 2017 年度までの 3 カ年計画で実施されたものである。この研究は各地域において伝統的木造船に関する調査研究を蓄積した研究者が共同し、日本と中国を中心とする東アジアの伝統的木造船の建造および操船技術の比較研究を行うものであった。研究地域は国内においては鉄釘使用以前の船材接合法が残る北陸および沖縄を中心とし、沖縄の木造船建造技術と関連の深い中国福建省の福州、泉州および、現在でも伝統的木造船建造が盛んに行われている浙江省舟山群島とし、必要に応じて国内および台湾の調査も行った。

写真 1　沖縄調査（2015 年 2 月）

2014年度には各自が行ってきた調査研究から課題を出し合い、それを基に調査方針の検討および沖縄の共同調査を行い、その妥当性を検証した。その結果、本研究の課題として造船技術においては、船体構造と船材、特に舷側材の接合方法と防水技術の比較研究に重点を置くこととし、操船技術については櫂と櫓に注目することとした。これらは、中国における現地調査が重要であり、現地の博物館、大学、研究機関の協力を得ることが必要であった。同年度に調査予定地の予備調査を行い、調査協力体制および造船所、船大工等の確認を行った。2015年度、2016年度は中国調査を重点的に行うこととし、個人別テーマに合わせて国内、台湾の調査も行った。

国内の伝統的木造船の研究では、実測図の作成は欠かせない。本研究における中国調査においても、国内の研究成果と比較する上で実測図の作成は欠かせないと考えた。また、造船過程や各部名称、船大工道具の名称、使用法など詳細なデータの聞き取りも行う必要があった。限られた調査期間でこれらを行うことは極めて困難であったが、現地の協力と神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科に在学している中国からの留学生の協力により十分な成果を挙げたと考える。刊行された報告書『東アジアの伝統的木造船建造および操船技術の比較研究［写真記録CD付］』国際常民文化研究叢書12にその成果が反映されている。

限られた期間と調査地域であったが、各共同研究者、研究協力者の研究蓄積と本共同研究の成果が有機的に結びつき、十分な研究成果が得られたものと自負している。今後は、中国内陸部や北部地域、韓国等への調査の機会を持ちたいと希望する。

写真２　中国調査（泉州／2016年８月）

写真３　中国調査（福州／2016年９月）

写真４　第２回共同研究フォーラム「東アジアの船―木造船技術とその構造―」（2017年７月）

■活動データ

2017年度の活動

○第２回共同研究フォーラム「東アジアの船―木造船技術とその構造―」2017年７月８日　昆政明・小熊誠・王蕾・出口晶子・出口正登・廣瀬直樹・前田一舟・織野英史・越來勇喜、安達裕之（日本海事史学会会長）

○成果報告書『東アジアの伝統的木造船建造および操船技術の比較研究［写真記録CD付］』国際常民文化研究叢書12　2018年３月23日